

「アガへ」

山口優

科学部部長の絵夢先輩は、いつも興味深い発明をする。

その日、彼女が作っていたのは、いわゆる惚れ葉だった。が、彼女の説明には、不可解な点があった。

「ただ、飲めばいいのよ。そうすれば惚れることになるわ。それだけ」

彼女はいった。彼女はフラスコの中の、果汁一〇〇パーセントオレンジジュースのよ  
うな液体を私に示して見せた。

「こわい？」

「だって、意味がわかりませんよ。飲んだ人が惚れるんですか？ 誰に？ 目の前にい  
る人に？」

「それは、飲んでからのお楽しみってことで」

絵夢先輩はにこにこ笑って、薦めてくる。彼女はいつも微笑んでいるし、わたしの宿  
題をみてくれたり、わたしの相談にのってくれたり、親身で優しい。けれど、底が見  
えない怖さもあった。

「遠慮しときます」

わたしはいった。絵夢先輩は心底残念そうに、ためいきをつく。  
「じゃあ、誰かに先に飲んでもらおうか。そしたら、安心する？」

「まあ、一番先に飲むよりは」

わたしはいった。ちょうどそのとき、啓太先輩が部室にはいつてきた。部室といつても、科学準備室なのだけども。

「絵夢、今日も来たよ」

啓太先輩はあからさまに絵夢先輩に惚れている。絵夢先輩はフラスコの液体を直接差し出した。

「いらっしやい。喉渴いたでしょ？」

「オレンジジュース？　ありがとう。絵夢は本当にやさしいね」

啓太先輩は、全く疑いを持たず、惚れ薬を飲んだ。そして、じっと絵夢先輩を見つめる。わたしは、何が起ころのか、とても興味を持って、啓太先輩と絵夢先輩を見つめた。

啓太先輩は、急に時計を見た。

「しまった。先生に呼ばれてたんだ。ごめん、絵夢。また後で会おう」

啓太先輩は踵をかえし、出て行った。

「どう？」

絵夢先輩がわたしに尋ねる。

「意味が分かりません。逆に惚れられなくなったんじゃないですか？」

「違うって。まあ見てて」

絵夢先輩は、笑顔、というシンプルな表現が似合う顔でいった。笑っているというこ  
と以外に、その表情からは何も読み取れなかった。

わたしは、絵夢先輩の言葉通り、啓太先輩の動きをそのときからずっと見ていた。成  
績があまりよくなり、遊んでばかりだった啓太先輩は、そのときから勉強に励むよう  
になり、生徒会長にも立候補した。真摯な演説が受けて当選し、会長になった今は、ユニ  
セフや赤い羽の共同募金、地域の清掃活動にいそしんでいる。

絵夢先輩とは、出会ったときには本当に愛しそうに話しかけるのに、彼女を部室に訪  
ねる機会はめっきり減ってしまった。

「やっぱり、惚れられなくなっちゃったじゃないですか」  
わたしは一年後、絵夢先輩にいった。

「誰も、目の前の人に惚れるようになるとは言っていないわ。啓太は、あれを飲んだ瞬間、  
すべての人が好きになったのよ。この世界にいるすべての人が。だから、私だけを好き

でいることができなくなっただけ」

絵夢先輩は、相変わらず、ただ笑っているだけの表情でいった。  
わたしは、ぞっとした。

啓太先輩は、これからずっと、社会のため、人々のため、全人類のために働き続けるだろう。だけど、彼がたった一人を愛することは、人を愛する喜びを知るとは、もう永遠にないのだ。

本人にとっては、幸せな人生なのだろうけど。